

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

威信

はしがき	2
第一章 人情の碗	2
茶は日常生活の俗事の中に美を崇拝する一種の神秘的宗教すなわち茶道の域に達す——茶道は社会の上下を通じて 広まる—— 新旧両世界の誤解——西洋における茶の崇拝——欧州の古い文献に現れた茶の記録——物と心の争いについての道教徒の話—— 現今における 富貴権勢を得ようとする争い	2
第二章 茶の諸流	6
茶の進化の三時期——唐、宋、明の時代を表す煎茶、抹茶、だし茶——茶道の鼻祖陸羽——三代の茶に関する理想——後世のシナ人には茶は美味な飲料ではあるが理想ではない——日本においては茶は生の術に関する宗教である	6
第三章 道教と禅道	7
道教と禅道との関係——道教とその後継者禅道は南方シナ精神の個人的傾向を表す——道鏡は浮世をかかるものと諦めて、この浮世の中に美を見出そうと努める——禅道は道教の教えを強調している——精進静慮することによって自性了解の極致に達せられる——禅道は道教と同じく相対を崇拝する——人生の些事の中にも偉大を考える禅の考え方が茶道の理想となる——道教は審美的理想の基礎を与え禅道はこれを実際的なものとした	7
第四章 茶室	10
茶室は茅屋に過ぎない——茶室の簡素純潔——茶室の構造における象徴主義——茶室の装飾法——外界の煩わしさを遠ざかった聖堂	10
第五章 芸術鑑賞	12
美術鑑賞に必要な同情ある心の交通——名人と我々の間の内密の黙契——暗示の価値——美術の価値はただそれが我々に語る程度による——現今の美術に対する表面的の熱狂は真の感じに根拠を置いていない——美術と考古学の混同——われわれは人生の美しいものを破壊することによって 美術を破壊している	12
第六章 花	15
花は我らの不断の友——「花の宗匠」——西洋の社会における花の浪費——東洋の花卉栽培——茶の宗匠と生花の法則——生花の方法——花のために花を崇拝すること——生花の宗匠——生花の流派、形式派と写実派	15
第七章 茶の宗匠	17
芸術を真に鑑賞することはただ芸術から生きた力を生み出す人にものみ可能である——茶の宗匠の芸術に対する貢献——処世上に及ぼした影響——利休の最後の茶の湯	17

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

はしがき

第一章 人情の碗

茶は日常生活の俗事の中に美を崇拜する一種の神秘的宗教すなわち茶道の域に達す——茶道は社会の上下を通じて 広まる—— 新旧両世界の誤解——西洋における茶の崇拜——欧州の古い文献に現れた茶の記録——物と心の争いについての道教徒の話—— 現今における 富貴権勢を得ようとする争い

第一章 人情の碗

茶は薬用として始まり後飲料となる。シナにおいては八世紀に高雅な遊びの一つとして詩歌の 域に達した。十五世紀に至り日本はこれを高めて一種の審美的宗教、すなわち茶道にまで進めた。茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拜することに基づく一種の儀式であって、純じゅんじゅん 粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を醇々と教えるものである。茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。いわゆる人生というこの不可解なものの中に、何か可能 なるのを成就しようとするやさしい企てであるから。

茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、に関するわれわれのいっさいの見解を表わしているものであるから。それは衛生学である、清潔をきびしく説くから。それは経済学である、というのは、複雑なぜいたくというよりもむしろ 単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾何学である、なんとすれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている。

日本が長い間世界から孤立していたのは、自省をする一助となって茶道の発達に非常に好都合であった。われらの住居、習慣、衣食、陶漆器、絵画等 文学でさえも——すべてその影響をこうむっている。いやしくも日本の文化を研究せんとする者は、この影響の存在を無視することはできない茶道の影響は貴人の優雅な聞房にも、下賤の者の住み家にも行き渡ってきた。わが 夫は花を生けることを知り、わが野人も山水を愛でるに至った。俗に「あの男は茶気がない」という。もし人が、わが身の上におこるまじめながらの滑稽を知らないならば。また浮世の悲もやきこつけいはんか つう 劇にとんじゃくもなく、浮かれ気分で騒ぐ半可通を「あまり茶気があり過ぎる」と言って非難する。

よその目には、つまらぬことをこのように騒ぎ立てるのが、実に不思議に思われるかもしれぬ。せん かわきちゃわん 一杯のお茶でなんという騒ぎだろうというであろうが、考えてみれば、煎ずるところ人間享樂の 茶碗は、いかにも狭いものではないか、いかにも早く涙であふれるではないか、無辺を求むる渴のとまらぬあまり、一息に飲みほされるではないか。してみれば、茶碗をいくらもてはやしたととがめだてには及ぶまい。人間はこれよりもまだまだ悪いことをした。酒の神バツカスを崇拜するのあまり、惜しげもなく奉納をし過ぎた。軍神マーズの血なまぐさい姿をさえも理想化した。はく そうげいろしてみれば、カメリヤの女皇に身をささげ、その祭壇から流れ出る暖かい同情の流れを、心ゆくばかり楽しんでよいではないか。象牙色の磁器にもられた液体琥珀の中に、その道の心得ある人は、孔子の心よき沈黙、老子の奇警、釈迦牟尼の天上の香にさえ触れることができる。

おのれに存する偉大なるものの小を感じることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚気をなしている千百の奇癖のまたの例に過ぎないと思って、袖の下で笑っているであろう。西洋人は、日本が平和な文芸にふけていた間は、野蛮国と見なしていたものである。しかるに満州の戦場に大々的殺戮を行ない始めてから文明国と呼んでいる。近ごろ武士道一わが兵士に喜び勇んで身を捨てさせる死の術について盛んに論評されてきた。しかし茶道にはほとんど注意がひかれていない。この道はわが生の術を多く説いているものであるが。もしわれわれが文明国たるためには、血なまぐさい戦争の名誉によらなければならないとするならば、むしろいつまでも野蛮国に甘んじよ

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

う。われわれはわが芸術および理想に対して、しかるべき尊敬が払われる時期が来るのを喜んで 待とう。

いつになったら西洋が東洋を理解するであろう、否、了解しようと努めるであろう。われわれ きる アジア人はわれわれに関して織り出された事実や想像の妙な話にしばしば胆を冷やすことがある。碗 われわれは、ねずみや油虫を食べて生きているのでないとしても、蓮の香を吸って生きていると 思われている。これは、つまらない狂信か、さもなければ見さげ果てた逸楽である。インドの心 霊性を無知といい、シナの誰直を愚鈍といい、日本の愛国心をば宿命論の結果といってあざけら れていた。はなはだしきは、われわれは神経組織が無感覚なるため、傷や痛みに対して感じが薄いとまで言われていた。

西洋の諸君、われわれを種にどんなことでも言うてお楽しみなさい。アジアは返礼いたします。まだまだおもしろい種になることはいくらでもあろう、もしわれわれ諸君についてこれまで、想 像したり書いたりしたことがすっかりおわかりになれば。すべて遠きものをば美しと見、不思議 に対して知らず知らず感服し、新しい不分明なものに対しては、口には出さねど憤るということがそこに含まれている。諸君はこれまで、うらやましく思うこともできないほど立派な徳を負わされて、あまり美しくて、とがめることのできないような罪をきせられている。わが国の昔の文 人はその当時の物知りであったまあこんなことを言っている。諸君には着物のどこか見 えないところに、毛深いしっぽがあり、そしてしばしば赤ん坊の細切り料理を食べていると! 否、われわれは諸君に対してもっと悪いことを考えていた。すなわち諸君は、地球上で最も実行 不可能な人種と思っていた。というわけは、諸君は決して実行しないことを口では説いているといわれていたから。

かくのごとき誤解はわれわれのうちからすみやかに消え去ってゆく。商業上の必要に迫られて 欧州の国語が、東洋幾多の港に用いられるようになって来た。アジアの青年は現代的教育を受けるために、西洋の大学に群がってゆく。われわれの洞察力は、諸君の文化に深く入り込むことは できない。しかし少なくともわれわれは喜んで学ぼうとしている。私の同国人のうちには、諸君の習慣や礼儀作法をあまりに多く取り入れた者がある。こういう人は、こわばったカラや丈の 高いシルクハットを得ることが、諸君の文明を得ることと心得違いをしていたのである。かかる様 子ぶりは、実に哀れむべき嘆かわしいものであるが、ひざまずいて西洋文明に近づこうとする証 拠となる不幸にして、西洋の態度は東洋を理解するに都合が悪い。キリスト教の宣教師は与え ぎょうできるように行き、受けようとはしない。諸君の知識は、もし通りすがりの旅人のあてにならない話に基づくのでなければ、わが文学の貧弱な翻訳に基づいている。ラフカディオ・ハーンの義侠的 たいまつ (I) ペン、または『インド生活の組織』の著者のそれが、われわれみずからの感情の松明をもって東 洋の闇を明るくすることはまれである。

私はこんなにあけすけに言って、たぶん茶道についての私自身の無知を表わすであろう。茶道 の高雅な精神そのものは、人から期待せられていることだけ言うことを要求する。しかし私は立 わざわい 派な茶人のつもりで書いているのではない。新旧両世界の誤解によって、すでに非常な禍をこう むっているのであるから、お互いがよく了解することを助けるために、いささかなりとも貢献す 人情の腕 に弁解の必要はない。二十世紀の初めに、もしロシアがへりくだって日本をよく了解していたら、血なまぐさい戦争の光景は見ないで済んだであろうに。東洋の問題をさげすんで度外視すれば、なんという恐ろしい結果が人類に及ぶことであろう。ヨーロッパの帝国主義は、黄禍のばか 叫びをあげることを恥じないが、アジアもまた、白禍の恐るべきをさとるに至るかもしれないということは、わかりかねている。諸君はわれわれを「あまり茶気があり過ぎる」と笑うかもしれないが、われわれはまた西洋の諸君には天性「茶気がない」と思うかもしれないではないか。東西両大陸が互いに奇響な批評を飛ばすことはやめにして、東西互いに得る利益によって、よし物がわかって来ないとしても、お互いにやわらかい気持ちになろうではないか。お互いに違った方面に向かって発展して来ているが、しかし互い 長短相補わない道理はない。諸君は心の落 ちつきを失ってまで膨張発展を遂げた。われわれは侵略に対しては弱い調和を創造した。諸君は 信ずることができますか、東洋はある点で西洋にまさっているということを!

不思議にも人情は今までのところ茶碗に東西相合している。茶道は世界的に重んぜられている 唯一のアジアの儀式である。白人はわが宗教道徳を嘲笑した。しかしこの褐色飲料は躊躇もなく 受け入れてしまった。午後の喫茶は、今や西洋の社会における重要な役をつとめている。盆や茶 の打ち合う微妙な音にも、ねんごろにもてなす婦人の柔らかい絹ずれの音にも、また、クリー ムや砂糖を勧められたり断わったりする普通の問答にも、茶の崇拝は疑いもなく確立しているということがわかる。渋いか甘いか疑わしい煎茶の味は、客を待つ運命に任せてあきらめる。この 一事にも東洋精神が強く現われているということがわかる。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

ヨーロッパにおける茶についての最も古い記事は、アラビヤの旅行者の物語にあると言われている。八七九年以後広東における主要なる歳入の財源は塩と茶の税であったと述べてある。マルコポーロは、シナの市舶司が茶碗を勝手に増したために、一二八五年免職になったことを記録している。ヨーロッパ人が極東について一層多く知り始めたのは、実に大発見時代の頃である。十六世紀の終わりにオランダ人は、東洋において灌木の葉からさわやかな飲料が造られることを報じた。ジオヴァーニ・パティスタ・ラムージオ(一五五九)、エル・アルメイダ(一五七六)、マフェノ(一五八八)、タレイラ(一六一〇)らの旅行者たちもまた茶のことを述べている。一六一〇年にオランダ東インド会社の船がヨーロッパに初めて茶を輸入した。一六三六年にはフランスに伝わり、一六三八年にはロシアにまで達した。英国は一六五〇年これを喜び迎えて、「彼の卓絶せる、かつすべての医者の推奨するシナ飲料、シナ人はこれを茶と呼び、他国民はこれをティまたはティーと呼ぶ」と言っていた。

この世のすべてのよい物と同じく、茶の普及もまた反対にあった。ヘンリー・セイヴィル(1 六七八)のような異端者は、茶を飲むことを不潔な習慣として口をきわめて非難した。ジョウナ スハンウェイは言った。(茶の説一七五六)茶を用いれば男は身のたけ低くなり、みめをそこない女はその美を失うと。茶の価の high ために(一ポンド約十五シリング) 初めは一般の人の 人情の きょうおう 消費を許さなかった。「歓待饗応用の王室御用品、王侯貴族の贈答用品」として用いられた。しかしこういう不利な立場にあるにもかかわらず、喫茶は、すばらしい勢いで広まって行った。十八世紀前半におけるロンドンのコーヒー店は、実際喫茶店となり、アディソンやスティールのような文士のつどうところとなり、茶を喫しながらかれらは退屈しのぎをしたものである。この飲料はまもなく生活の必需品 一課税品となった。これに関連して、現代の歴史において茶が いかにも主要な役を務めているかを思い出す。アメリカ植民地は圧迫を甘んじて受けていたが、ついに、茶の重税に堪えかねて人間の忍耐力も尽きてしまった。アメリカの独立は、ボストン港に 茶箱を投じたことに始まる。

茶の味には微妙な魅力があって、人はこれに引きつけられないわけにはゆかない、またこれを 理想化するようになる。西洋の茶人たちは、茶のかおりとかれらの思想の芳香を混ざるに鈍では ござまん なかった。茶には酒のような傲慢なところがない。コーヒーのような自覚もなければ、またココアのような気取った無邪気もない。一七〇一年にすでにスペクテイター紙に次のように言っている。「それゆえに私は、この私の考えを、毎朝、茶とバターパンに一時間を取っておかれるようなすべての立派な御家庭へ特にお勧めしたいと思えます。そして、どうぞこの新聞を、お茶の したくの一部として、時間を守って出すようにお命じになることを、せつにお勧めいたしま いんごう す。」サミュエル・ジョンソンはみずからの人物を描いて次のように言っている。「因業な恥知らずのお茶飲みで、二十年間も食事を薄くするにただこの魔力ある植物の振り出しをもってした。そして茶をもってタベを楽しみ、茶をもって真夜中を慰め、茶をもって晨を迎えた。」

ほんとうの茶人チャールズ・ラムは、「ひそかに善を行なって偶然にこれが現われることが何よりの愉快である。」というところに茶道の真髓を伝えている。というわけは、茶道は美を見いださんがために美を隠す術であり、現わすことをはばかりのようなものをほのめかす術である。この道はおのれに向かって、落ち着いてしかし十分に笑うけだかい奥義である。従ってヒューマー そのものであり、悟りの微笑である。すべて真に茶を解する人はこの意味において茶人と言って ほしいいき もよかろう。たとえばサッカレー、それからシェイクスピアはもちろん、文芸廃額期の詩人もまた。(と言っても、いずれの時か廃額期でなかろう)物質主義に対する反抗のあまりいくらか茶道の思想を受け入れた。たぶん今日においてもこの「不完全」を真摯に静観してこそ、東西相会しんし 互いに慰めることができるであろう。

27

道教徒は言う、「無始」の始めにおいて「心」と「物」が決死の争闘をした。ついに大日輪皇帝は闇と地の邪神祝融に打ち勝った。その巨人は死苦のあまり頭を天涯に打ち付け、硬玉の青天を粉碎した。星はその場所を失い、月は夜の寂寞たる天空をあてもなくさまようた。失望のあまり黄帝は遠く広く天の修理者を求めた。探し求めたかいはあって東方の海から女媧という女皇、角をいただき竜尾をそなえ、火の甲冑をまとして燦然たる姿で現れた。その神は不思議な大鎌に五色の虹を焼き出し、シナの天を建て直した。しかしながら、また女媧は蒼天にある二個の小隙を埋めることを忘れたと言われている。かくのごとくして愛の二元論が始まった。すなわち二個の霊は空間を流転して留まることを知らず、ついに合して始めて完全な宇宙をなす。人はおのおのの希望と平和の天空を新たに立て直さなければならぬ。現代の人道の天空は富と権力を得んと争う莫大な努力によって全く粉碎せられている。世は利己、俗悪の闇に迷っている。知識は心にやましいことをして得られ、仁は実利のために行われている。東西両洋は、立ち騒ぐ海に投げ入れられた二竜のごとく、人生の宝玉を得ようとすれどもそのかいもない。この大荒廃を繕おうために再び女媧を必要とする。我々は大権化の出現を待つ。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るい午後の日は竹林にはえ、泉水はうれしげな音を立て、松籟は我が茶釜に聞こえている。はかないことを夢見て美しいとりとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第二章 茶の諸流

茶の進化の三時期——唐、宋、明の時代を表す煎茶、抹茶、**だし**茶——茶道の鼻祖陸羽——三代の茶に関する理想——後世のシナ人には茶は美味な飲料ではあるが理想ではない——日本においては茶は生の術に関する宗教である

茶は芸術品であるから、その最もけだかい味を出すには名人を要する。茶にもいろいろある、たきく絵画に傑作と駄作と概して後者があると同様に。と言っても、立派な茶をたてるのにこれぞという秘法はない、ティシアン、雪村のごとき名画を作製するのに何も規則がないと同様に。茶はたてるごとに、それぞれ個性を備え、水と熱に対する特別の親和力を持ち、世々相伝の追憶を伴ない、それ独特の話しぶりがある。真の美は必ず常にここに存するのである。芸術と人生のこの単純な根本的法則を、社会が認めないために、われわれはなんとという損失をこうむっている。りちゅうこうことであろう。宋の詩人李仲光は、世に最も悲しむべきことが三つあると嘆じた、すなわち誤れる教育のために立派な青年をそこなうもの、鑑賞の俗悪なために名画の価値を減ずるもの、手ぎわの悪いために立派なお茶を全く浪費するものこれである。

芸術と同じく、茶にもその時代と流派とがある。茶の進化は概略三大時期に分けられる、抹茶および海茶すなわちこれである。われわれ現代人はその最後の流派に属している。これら茶のいろいろな味わい方は、その流行した当時の時代精神を表わしている。と言うのは、人生はわれらの内心の表現であり、知らず知らずの行動はわれわれの内心の絶えざる発露であるから。孔子いわく「人いづくんぞさんや、いるんづくんぞさんや」と。たぶんわれわれは隠すべき偉大なるのが非常に少ないからであろう、些事に自己を顕わすことが多すぎて困る。日々起こる小事件も、哲学、詩歌の高翔と同じく人種的理想の評論である。愛好する葡萄酒の違いでさえ、ヨーロッパのいろいろな時代や国民のそれぞれの特質を表わしているように、茶の理想もいろいろな情調の東洋文化の特徴を表わしている。煮る団茶、かき回す粉茶、淹す葉茶はそれぞれ、唐、宋、明の気分を明らかに示している。もし、芸術分類に濫用された名称を借りるとすれば、これらをそれぞれ、古典的、ローマン的、および自然主義的な茶の諸流と言えるであろう。

南シナの産なる茶の木は、ごく早い時代からシナの植物学界および薬物学界に知られていた。古典には？？？というようないろいろな名前を書いてあって、疲労をいやし、精神をさわやかにし、意志を強くし、視力をととのえる効能があるために大いに重んぜられた。ただに内服薬として服用せられたのみならず、しばしばリュウマチの痛みを軽減するために、として外用薬にも用いられた。道教徒は、不死の靈薬の重要な成分たることを主張した。仏教く徒は、彼らが長時間の黙想中に、睡魔予防剤として広くこれを服用した。

四五世紀のころには、揚子江流域住民の愛好飲料となった。このころに至って始めて、現代用いている「茶」という表意文字が造られたのである。これは明らかに、古い「様」の字の俗字であろう。南朝の詩人は「液体硬玉の泡沫」を熱烈に崇拝した跡が見えている。また帝王は、高官の者の勲功に対して上製の茶を贈与したものである。しかし、この時期における茶の飲み方はきはじかみきつびわめて原始的なものであった。茶の葉を蒸して臼に入れてつき、団子として、米、塩、橘皮、もうこ香料、牛乳等、時には葱とともに煮るのであった。この習慣は現今チベット人および蒙古種族の間に伝わっていて、彼らはこれらの混合物で一種の妙なシロップを造るのである。ロシア人がレモンの切れを用いるのは彼らはシナの隊商宿から茶を飲むことを覚えたのであるが———小の古代の茶の飲み方が残っていることを示している。

茶をその粗野な状態から脱して理想の域に達せしめるには、実に唐朝の時代精神を要した。八世紀の中葉に出た陸羽をもって茶道の鼻祖とする。彼は、仏、道、儒教が互いに混淆せんとしている時代に生まれた。その時代の汎神論的象徴主義に促されて、人は特殊の物の中に万有の反映を見るようになった。詩人陸羽は、茶の湯に万有を支配している物と同一の調和と秩序を認めた。彼はその有名な著作茶教(茶の聖典)において、茶道を組織立てたのである。爾来彼は、シナの茶をひさぐ者の保護神としてあがめられている。

茶経は三巻十章よりなる。彼は第章において茶の源を論じ、第二章、製茶の器具を論じ、第三章、製茶法を論じている。彼の説によれば、茶の葉の質の最良なものは必ず次のようなものである。

胡人ののごとくなる者蹙縮然たり 牛の臍なる者廉然たり 浮雲の山をいずる者輪菌然たり 軽の水を払う者澹然たり また新治の地なる者暴流糧雨の経る所に遭うがごとし

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第四章はもっぱら茶器の二十四種を列挙してこれについての記述であって、風炉に始まり、これらのすべての道具を入れる都鑑に終わっている。ここにもわれわれは陸羽の道教象徴主義に対する偏好を認める。これに関して、シナの製陶術に及ぼした茶の影響を観察してみることもまた興味あることである。シナ磁器は、周知のごとく、その源は硬玉のえも言われぬ色合いを表わ のうらん みんな だしちゃ よくこくかつよくそうとの試みに起こり、その結果唐代には、南部の青磁と北部の白磁を生じた。陸羽は青色を茶碗に理想的な色と考えた、青色は茶の緑色を増すが白色は茶を淡紅色にしてまずそうにするから。それは彼が団茶を用いたからであった。その後末の茶人らが粉茶を用いるに至って、彼らは濃藍 色および黒褐色の重い茶碗を好んだ。明人は淹茶を用い、軽い白磁を喜んだ。

第五章において陸羽は茶のたて方について述べている。彼は塩以外の混合物を取り除いている。彼はまた、これまで大いに論ぜられていた水の選択、煮沸の程度の問題についても詳述している。彼の説によると、その水、山水を用うるは上江水は中、井水は下である。煮沸に三段あるそ ゆうせんれんしゅ) داد とりばこおり (一匹) の沸魚目のごとく、すこし声あるを一沸となし、縁辺の涌泉蓮珠のごとくなるを二沸となし、騰波鼓浪を三沸となしている。団茶はこれをあぶって嬰兒の臂のごとく柔らかにし、紙袋を用いてこれをたくわう。初沸にはすなわち、水量に合わせてこれをととのうるに塩味をもってし、第

1.

宋人の茶に対する理想は唐人とは異なっていた。ちょうどその人生観が違っていったように。宋人は、先祖が象徴をもって表そうとしたことを写實的に表そうと努めた。新儒教の心には、宇宙の法則はこの現象世界に映らなかったが、この現象世界がすなわち宇宙の法則そのものであった。永劫はこれただ瞬時——涅槃は常に掌握のうち、不朽は永遠の変化に存するという道教の考えが彼らのあらゆる考え方にしみ込んでいた。興味あるところはその過程にあって行為ではなかった真に肝要なるは完成することであって完成ではなかった。かくのごとくして人は直ちに天に直面するようになった。新しい意味は次第に生の術に入ってきた。茶は風流な遊びではなくなって、自性了解の一つの方法となってきた。王元之は茶を称揚して、直言のごとく靈をあふらせ、その爽快な苦みは善言の余馨を思わせるといった。蘇東坡は茶の清浄無垢な力について、真に有徳の君子のごとく汚すことができないと書いている。仏教との間では、道教の教義を多く交えた南方の禅宗が苦心丹精の茶の儀式を組み立てた。僧らは菩提達磨の像の前に集まって、ただ一個の椀から聖餐のようにすこぶる儀式張って茶を飲むのであった。この禅の儀式こそはついに発達して十五世紀における日本の茶の湯となった。

37日本の茶の湯においてこそはじめて茶の理想の極点を見ることができるのである。一二八一年蒙古襲来に当たってわが国は首尾よくこれを撃退したために、シナ本国においては蛮族侵入の不幸に絶たれた宋の文化運動を我々は続行することができた。茶は我々にあっては飲む形式の理想化より以上のものとなった、今や茶は生の術に関する宗教である。茶は純粹と都雅を崇拝すること、すなわち主客協力してこのおりにこの浮世の姿から無常の幸福を作り出す神聖な儀式を行う口実となった。茶室は寂寞たる人世の荒野における沃地であった。疲れた旅人はここに会して芸術鑑賞という共同の泉から渴きをいやすことができた。茶の湯は茶、賀弁(かき)、絵画等を主題に仕組まれた即興劇であった。茶室の調子を破る一言も発せず、全ての行動を単純に自然に行う——こういうのがすなわち茶の湯の目的であった。そしていかにも不思議なことには、それがしばしば成功したのであったその全ての背後には微妙な哲理が潜んでいた。茶道は道教の仮の姿であった。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第三章 道教と禅道

道教と禅道との関係——道教とその後継者禅道は南方シナ精神の個人的傾向を表す——道鏡は浮世をかかると諦めて、この浮世の中に美を見出そうと努める——禅道は道教の教えを強調している——精進静慮することによって自性了解の極致に達せられる——禅道は道教と同じく相対を崇拜する——人生の些事の中にも偉大を考える禅の考え方が茶道の理想となる——道教は審美的理想の基礎を与え禅道はこれを実際的なものとした

39

老子自らその奇警な言でいうに、「下士は道を聞きて大いにこれを笑う。笑わざればもって道となすに足らず。」と「道」は文字通りの意味は「経路」である。それはthe Way(行路)、the Absolute(絶対)、the Law(法則)、the Nature(自然)、Supreme Reason(至理)、the Mode(方式)、等いろいろに翻訳されている。こういう訳も誤りではない。というのは道教とのこの言葉の用法は、問題にしている話題如何によって異なっているから。老子自らこれについて次のように言っている。物有り混成し、天地に先立って生ず。寂たり寥たり。独立して改めず。周行して危うからず。もって天下の母となすべし。我その名を知らず。これを字して道という。強いてこれが名をなして大という。大を逝といい逝を遠といい、遠を反という。「道」は「経路」というよりもむしろ通路にある。宇宙変遷の精神、すなわち新しい形を生み出そうとして絶えずめぐり来たる永遠の成長である。「道」は道教徒の愛する象徴龍のごとくにすでに反り、雲のごとく巻ききたっては解け去る。「道」は大推移ともいうことができよう。主観的にいえば宇宙の気であって、その絶対は相対的なものである。

40

道教思想の萌芽は老聃出現の遠い以前に見られる。シナ古代の記録、特に易教は老子の思想の先駆をなしている。しかし紀元前十二世紀、周朝の確立とともに古代シナ文化は隆盛その極に達し、法律慣習が大いに重んぜられたために、個人的思想の発達には長い間阻止せられていた。周崩壊して無数の独立国起こるにおよび、はじめて自由思想が華やかに咲き誇ることができた。老子、莊子はともに南方人で新派の大主唱者であった。一方孔子はその多くの門弟とともに古来の伝統を保守せんと志したものである。道教を解せんとするには多少儒教の心得がいる。この逆も同じである。

41

道教でいう絶対は相対であることはすでに述べたところであるが、倫理学においては道教は社会の法律道徳を罵倒した。というのは彼らにとっては正邪善悪はたんなる相対的の言葉であったから。定義は常に制限である。「一定」「普遍」はたんに成長停止を表す言葉にすぎない。屈原曰く「聖人はよく世とともに推移す」我らの道徳的規範は社会の過去の必要から生まれたものであるが、社会は依然として旧態にとどまるべきものであろうか。社会の慣習を守るためには、その国に対して個人を絶えず犠牲にすることを免れぬ。教育はその大迷想を続けんがために一種の無知を奨励する。人は真に徳行ある人たることを教えられずして行儀正しくせよと教えられる。我らは恐ろしく自己意識が強いから不道徳を行う。おのれ自身が悪いと知っているから人を決して許さない。他人に真実を語ることを恐れているから良心を育み、おのれに真実を語るを恐れてうぬぼれを避難所にする。世の中そのものがばかばかしいのに誰がよくまじめでいられよう！といい、物々交換の精神は至る所にあらわれている。義だ！貞節だ！等というが、親善の小売りをして悦に入っている販売人を見よ。人はいわゆる宗教さえもあがなうことができる。それは実のところたかの知れた倫理学を花や音楽で清めたもの。教会からその付属物を取り去ってみよ、後にないが残るか。しかしトラストは不思議なほど繁盛する。値段が途方もなく安いから——天国へ行く切符代のご祈祷も、立派な公民の免許状も。めいめい速く能を隠すがよい。もし本当に重宝だと世間へ知れたならば、直ぐに競売に出されて最高入札者の手に落とされよう。男も女も何故にかほど自己を広告したいのか。奴隷制度の昔に起源する一種の本能に過ぎないのではないか。

43

しかしながら、道教がアジア人の生活に対してなした主な貢献は美学の領域であった。シナの歴史家は道教のことを常に「処世術」と呼んでいる、というのは道教は現在を——我ら自身を取り扱うものであるから。我らこそ神と自然の相会うところ、昨日と明日の分かれるところである。「現在」は移動する「無窮」である。「相対性」の合法的活動範囲である。「相対性」は「安排」を求める。「安排」は「術」である。人世の術は我らの環境に

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

対して絶えず安排するにある。道教は浮世をこんなものと諦めて、儒教徒や仏教徒とは異なって、この浮世の中にも美を見出そうと努めている。宋代のたとえ話に「三人の酢を味わう者」というのがあるが、三教義の傾向を実に立派に説明している。昔、釈迦牟尼、孔子、老子が人世の象徴酢瓶の前に立って、おのおの指をつけてそれを味わった。実際的な孔子はそれが酸いと知り、仏陀はそれを苦いと呼び、老子はそれを甘いと言った。

43

道教は主張した。もし誰も彼もみなが統一を保つようにするならば人生の喜劇はなお一層面白くすることができる。物の釣り合いを保って、おのれの地歩を失わず他人に譲ることが浮世芝居の成功の秘訣である。我々はおのれの役を立派に勤めるためには、その芝居全体を知っていなければならぬ。個人を考えるために全体を考えることを忘れてはならない。このことを老子は「虚」という得意の隠喩で説明している。物の真に肝要なところはただ虚にのみ存すると彼は主張した。例えば室の本質は、屋根と壁に囲まれた空虚なところに見出すことができるのであって、屋根や壁そのものにはない。水差しの役に立つところは水を注ぎ込むことのできる空所にあって、その形状や製品の如何には存しない。虚そのものを含有するから万能である。虚においてのみ運動が可能となる。おのれを虚にして他を自由に入らすことのできる人は、全ての立場を自由に行動することができるようになるであろう。全体は常に部分を支配することができるのである。

44

生の術を極めた人は、道教との言うところの「士」であった。士は生まれると夢の国にはいる、ただ死に当たって現実に目覚めようとするように。おのが身を世に知れず隠すさんために、みずからの聡明の光を和らげ、「予として冬、川を渉るがごとく、猶として四隣を恐るるがごとく、儼としてそれ客のごとく、渙として氷のまさに溶けんとするがごとく、敦としてそれ撲のごとく、曠としてそれ谷のごとく、渾としてそれ濁るのごとし。」士にとって人世の三宝は、慈、儉、および「あえて天下の先とならず。」ということであった。

45

さて禅に注意を向けてみると、それは道教の教えを強調していることがわかるであろう。禅は梵語の禅那から出た名であって、その意味は静慮である。精進静慮することによって自制了解の極致に達することができる。静慮は悟道に入ることのできる六波羅密の一つであって、釈迦牟尼はその後年の教えにおいて、特にこの方法を力説し、六則をその高弟迦葉に伝えた禅宗徒は確言している。彼らの言い伝えによれば、禅の始祖迦葉はその奥義を阿難陀に伝え、阿難陀から順次に祖師相伝えてついに第二十八祖菩提達磨に至った。菩提達磨は六世紀の前半に北シナに渡ってシナ禅宗の第一祖となった。これらの祖師やその教理の歴史については不確実なところが多い。禅を哲学的に見れば昔の禅学は一方において那伽闍刺樹那のインド否定論に似ており、また他方においては商羯羅阿闍梨の組み立てた無明観に似たところがあるように思われる。今日我らの知っているとおりの禅の教理は南方禅の開山シナの第六祖慧能(六三七～七一三)がはじめて説いたに違いない。慧能の後、程なく馬祖大師(七八八滅)これを継いで禅を中国人の生活における一活動勢力に作り上げた。馬祖の弟子百丈(七一九～八一四)は禅宗叢林を開創し、禅林清規を制定した。馬祖の時代以後の禅宗の問答を見ると、揚子江岸精神の影響を被って、昔のインド理想主義とは際だって違ったシナ固有の考え方を増していることがわかる。いかほど宗派的精神の誇りが強くて、そうではないといったところで、南方禅が老子や清談家の教えに似ていることを感じないわけにはいかない。道德教の中にすでに精神集中の重要なことや氣息を適当に調節することを述べている——これは禅定に入るに必要な欠くべからざる要件である。道德教の良注釈のあるものは禅学者によって書かれたものである。

46

禅道は道教と同じく相対を崇拜するものである。ある禅師は禅を定義して南天に北極星を識るの術とっている。真理は反対なものを会得することによってのみ達せられる。さらに禅道は道教と同じく個性主義を強く唱道した。我ら自らの精神の働きに関係しないものは一切実在ではない。六祖慧能かつてに僧が風に翻る塔上の幡を見て対論するのを見た。「一はいわく幡動くと、一はいわく風動くと。」しかし、慧能は彼らに説明していった、これ風の動くにあらず、また旗の動くにあらずただ彼ら自らの心中のあるものの動くなり。百丈が一人の弟子と森の中を歩いていると一匹のウサギが彼らの近寄ったのを知って疾走し去った「なぜウサギはおまえから逃げ去ったのか。」と百丈がたずねると、「私を恐れてでしょう。」と答えた。祖師はいった、「そうではない、おまえに残忍性があるからだ。」と。この対話は道教の徒莊子の話を思い起こさせる。ある日莊子友と濠梁のほとりに遊んだ。莊子いわく、「儻魚出で遊びて従容たり。これ魚の楽しむなり。」と。その友彼に答えていわく、「子は

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

魚にあらず、いづくんぞ魚の楽しきを知らん。」と。「子は我にあらず、いづくんぞわが魚の楽しきを知らざるを知らん。」と莊子は答えた。

47

禪は正統の仏道の教えとしばしば相反した。ちょうど道教が儒教と相反したように。禪門の徒の先験的洞察に対しては言語はただ思想の妨害となるものであった仏典のあらん限りの力をもってしてもただ個人的思索の注釈に過ぎないのである。禪門の徒は事物の内面的精神と直接交通しようと志し、その外面的の付属物はただ真理に到達する阻害と見なした。この絶対を愛する精神こそは禪門の徒をして古典仏教波の精巧な彩色画よりも墨絵の略画を選ばしめるに至ったのである。禪学徒の中には、偶像や象徴によらないでおのれの中に仏陀を認めようと努めた結果、偶像破壊主義者になった者さえある。丹霞和尚は大寒の日に木仏をとってこれを焚いたという話がある。かたわらにいた人は非常に恐れて言った、「なんとまあもったいない！」と。和尚は落ち着き払って答えた、「わしは仏様を焼いて、おまえさんたちのありがたがっているお舍利を取るのだ。」「木仏の頭からお舍利が出てたまるものですか。」とつっけんどんな受け答えに、丹霞和尚が答えて言った。「もし、お舍利のでない仏様なら、何ももったいないことはないではないか。」そういつて振り向いてたき火に体をあたためた。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第四章 茶室

茶室は茅屋に過ぎない——茶室の簡素純潔——茶室の構造における象徴主義——茶室の装飾法——外界の煩わしさを遠ざかった聖堂

52

わが国の偉い茶人はみな禅を修めた人であった。そして禅の精神を現実生活の中へ入れようと企てた。こういうわけで茶室は茶の湯の他の設備と同様に禅の教義を多く反映している。正統の茶室の広さは四畳半で維摩の経文の一節によって定められている。その興味ある著作において、馥柯羅摩訶秩多は文殊師利菩薩と八万四千の仏陀の弟子をこの狭い室に迎えている。これすなわち真意悟った者には一切皆空という理論の基づく例え話である。さらに待合いから茶室に通ずる路地は黙想の第一階段、すなわち自己証明に達する通路を意味していた。路地は下界との関係を絶って、茶室そのものにおいて美的趣味を十分に味わう助けとなるように新しい感情を起こすためのものであった。この庭徑を踏んだことのある人は、常緑樹の薄明に下には松葉の散り敷くところを、調和ある不ぞろいな庭石の上を渡って、苔むした石灯籠のかたわらを過ぎる時、わが心のいかに高められたかを必ず思い出すであろう。例えば都市の真ん中にいてもなお、あたかも文明の雑踏や塵を離れた森の中にいるような感がする。こういう静寂純潔の効果を生ぜしめた茶人の巧みは実に偉いものであった。路地を通り過ぎる時に起こすべき感情の性質は茶人によっていろいろ違っていた。利休のような人たちは全くの静寂を目的とし、路地を作るの奥意は次の古歌の中にこもっていると主張した。見渡せば花ももみじもなかりけり、浦のとまやの秋の夕暮れ その他小堀遠州のような人々はまた別の効果を求めた。遠州は庭徑の着想は次の句の中にあると言った。

夕月夜海少しある木の間かな

55

これに関連して、茶人たちの抱いていた清潔という考えをよく説明している利休についての話がある。利休はその子紹安が路地を掃除し水をまくのを見ていた。紹安が掃除を終えた時利休はまだ充分でない。」と言ってもう一度し直すように命じた。嫌々ながら一時間もかかってから息子は父に向かって言った。「お父さん、もう何もすることはありません。庭石は三度洗い石灯籠や庭木にはよく水をまきコケは生き生きした緑色に輝いています。地面には小枝一本も木の葉一枚ありません。」「馬鹿者、路地の掃除はそんな風にするものではない。」と言ってその茶人はしかった。こう言って利休は庭におり立ち一樹を揺すって、庭一面に秋の錦を片々と黄金、紅の木の葉を散りしかせた。利休の求めたものは清潔のみではなくて美と自然とであった。

57

「空き家」という言葉は道教の万物包涵の説を伝えるほかに、装飾精神の変化を絶えず必要とする考えを含んでいる。茶室はただ暫時美的感情を満足させるためにおかれる物を除いては、全く空虚である。何か特殊な美術品を臨時に持ち込む、そしてその他の物はすべて主調の美しさを増すように選択配合せられるのである。人はいろいろな音楽を同時に聞くことはできぬ、美しい物の真の理解はただある中心点に注意を集中することによってのみできるのであるから。かくのごとくわが茶室の装飾法は、現今西洋に行われている装飾法、すなわち屋内がしばしば博物館に変わっているような装飾法とは趣を異にしていることがわかるだろう。装飾の単純、装飾法のしばしば変化するのに慣れている日本人の目には、絵画、彫刻、骨董品のおびただしい陳列で永久的に満たされている西洋の屋内は、たんに俗な富を誇示しているに過ぎない感を与える。一個の傑作品でも絶えずながめて楽しむには多大の鑑賞力を要する。してみれば欧米の家庭にしばしば見るような色彩形状の混沌たる間に毎日毎日生きている人たちの風雅な心はさぞかし再現もなく深いものであろう。

58

「数寄屋」はわが装飾法の他の方面を連想させる。日本の美術品が均斉を欠いていることは西洋批評家のしばしば述べるところである。これもまた禅を通じて道教の理想の現れた結果である。儒教の根深い両元主義も、北方仏教の三尊崇拝も、決して均斉の表現に反対したものではなかった。実際、もしシナ古代の青銅器具また唐代および奈良時代の宗教的美術品を研究してみれば均斉を得るために不斷の努力をしたことが認められるであろう。わが国の古典的屋内装飾はその配合が全く均斉を保っていた。しかしながら道教や禅の「完全」という概念は別のものであった。彼らの哲学の動的な性質は完全そのものよりも、完全を求むる手続きに重きをおいた。真の美はただ「不完全」を心の中に完成する人によってのみ見出される。人生と芸術の力強いところはその

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

発達の可能性に存した。茶室においては、自己に関連して心の中に全効果を完成することが客各自に任されている。禅の考え方が世間一般の思考形式となって以来、極東の美術は均斉ということは完成を表すのみならず重複を表すものとしてことさらに避けていた。意匠の均等は創造の精神を全く破壊するものと考えられていた。この故に人物よりも山水花鳥を画題として好んで用いるようになった。人物は見る人自らの姿として現れているのであるから。実際我々は往々あまりに自己をあらわし過ぎて困る。そして我々は虚栄心があるにもかかわらず自愛さえも単調になりがちである。茶室においては重複の恐れが絶えずある。室の装飾に用いる種々な物は色彩意匠の重複しないように選ばなければならぬ。生花があれば草花の画は許されぬ。丸い釜を用いれば水差しは角張っていないなければならぬ。黒釉薬の茶碗は黒塗りの茶入れとともに用いてはならぬ。香炉や花瓶を床の間にすえるにも、その場所を二等分してはならないから、ちょうどその真ん中に置かぬよう注意せねばならぬ。少しでも案内の単調の気味を破るために、床の間の柱は他の柱とは異なった材木を用いねばならぬ。この点においてもまた日本の室内装飾法は西洋の壁炉やその他の場所に物が均等に並べてある装飾法と異なっている。西洋の家では我々から見れば無用の重複と思われる物にしばしば出くわすことがある。背後からその人の全身像がじっとこちらを見ている人と対談するのはつらいことである。肖像の人が、語っている人か、いずれが真のその人であろうかといふかり、その一方は偽物に違いないという妙な確信を抱いてくる。お祝いの饗宴に連なりながら食堂の壁に描かれたたくさんの物をつくづくながめて、密かに消化の傷害を起こしたことは幾度も幾度もある。

60

茶室は簡素にして俗を離れているから真に外界の煩わしさを遠ざかった聖堂である。ただ茶室においてのみ人は落ち着いて美の崇拝に身を捧げることができる。十六世紀日本の改造統一に預かった政治家やたけき武士にとって茶室は有り難い休養所となった。十七世紀徳川治世の厳しい儀式固守主義の発達した後は、茶室は芸術的精神と自由に交通する唯一の機会を与えてくれた。偉大なる外右術品おまえには大名も武士も平民も差別はなかった。今日は工業主義のために真に風流を楽しむことは世界至る所ますます困難になっていく。我々は今までよりも一層茶室を必要とするのではなかろうか。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第五章 芸術鑑賞

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通——名人と我々の間の内密の默契——暗示の価値——美術の価値はただそれが我々に語る程度による——現今の美術に対する表面的の熱狂は真の感じに根拠を置いていない——美術と考古学の混同——われわれは人生の美しいものを破壊することによって美術を破壊している

61

諸君は「琴ならし」という道教徒の物語を聞いたことがありますか。大昔、竜門の峡谷に、これぞ真の森の王と思われる古桐があった。頭はもたげて星と語り、想いは深く地中におろして、その青銅色のとぐろ巻きは、治下に眠る銀竜のそれと絡まっていた。ところが、ある偉大な妖術者がこの木を切って不思議な琴をこしらえた。そしてその頑固な精を和らげるには、ただ楽聖の手にまつより他はなかった。長い間その楽器は皇帝に秘蔵せられていたが、その弦から妙なる音を引き出そうと名手がかわるがわる努力してもそのかいは全くなかった。彼らのあらん限りの努力に答えるものはただ軽侮の音、彼らの喜んで歌おうとする歌とは不思議な琴の音ばかりであった。ついに伯牙という琴の名手が現れた。御しがたい馬を沈めようとする人のごとく、彼はやさしく琴を撫し、静かに弦をたたいた。自然と四季を歌い、高山を歌い、流水を歌えば、その古桐の追憶はすべて呼び起こされた。再び、柔らかい春風はその枝の間に戯れた。峡谷を踊りながら下ってゆく若い奔流は、つばみの花に向かって笑った。たちまち聞こえるのは夢のごとき、数知れぬ夏の虫の声、雨のぱらぱらと柔らかに落ちる音、悲しげな郭公の声。聞け！虎うそぶいて、谷これにこたえている。秋の曲を奏すれば、物さびしき夜に、剣のごとき鋭い月は霜のおく草葉に輝いている。冬の曲となれば、雪空に白鳥の群れが渦巻き、霰はぱらぱらと、嬉々として枝を打つ。次に伯牙は調べを変えて恋を歌った。森は深く思案にくれている熱烈な恋人のようにゆらいだ。空にはつんとした乙女のような冴えた美しい雲が飛んだ。しかし失望のような黒い長い影を地上にひいて過ぎていった。さらに調べを変えて戦いを歌い、剣戟の響きや駒の蹄の音を歌った。すると、琴中に竜門の暴風雨起こり、竜は電光に乗り、轟轟たる雪崩は山々になり渡った。帝王は驚喜して、伯牙に彼の成功の秘訣の存するところを尋ねた。彼は答えて言った、「陛下、他の人々は自己のことばかり歌ったから失敗したのであります。私は琴にその楽想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、本当に自分にもわかりませんでした。」と。

62

この物語は芸術鑑賞の極意をよく説明している。傑作というものは我々の心琴に奏でる一種の交響曲である。心の芸術は伯牙であり、われわれは竜門の琴である。美の靈手に触れる時、わが心琴の神秘の弦は目覚め、われわれはこれに呼応して振動し、肉を踊らせ血を沸かす。心は心と語る。無言のものに耳を傾け、見えないものを凝視する。名匠はわれわれの知らぬ調べを呼び起こす。長く忘れていた追憶はすべて新しい意味を持って帰ってくる。恐怖におさえられていた希望や、認める勇気のなかった憧憬が、栄えばえと現れて来る。わが心は画家の絵の具を塗る画布であるその色素はわれわれの感情である。その濃淡の配合は、喜びの光であり悲しみの影である。われわれは傑作によって存するごとく、傑作はわれわれによって存する。

63

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通は、互譲の精神によらなければならない。美術家は通信を伝える道を心得ていなければならないように、鑑賞者は通信を受けるに適當な態度を養わなければならない。宗匠小堀遠州は、自ら大名でありながら、次のような忘れがたい言葉を残している。「偉大な絵画に接するには、王侯に接するごとくせよ。」傑作を理解しようとするには、その前に身を低うして息を殺し、一言一句も聞きもらさじと待っていないなければならない。宗のある有名な批評家が、非常に面白い自白をしている。「若い頃には、おのが好む絵を描く名人を称揚したが、鑑識力の熟するに従って、おのが好みに適するように、名人たちが選んだ画を好むおのれを称した。」現今、名人の気分を骨を折って研究する者が実に少ないのは、誠に嘆かわしいことである。われわれは、手の着けようのない無知のために、この造作のない礼儀を尽くすことをいとう、こうして、眼前に抬げられた美の供応にも預からないことがしばしばある。名人にはいつでもご馳走の用意があるが、われわれはただ自ら味わう力がないために飢えている。

63

同情ある人に対しては、傑作が生きた実在となり、僚友関係のよしみでこれに引きつけられるこちがする名人

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

は不朽である。というのは、その愛もその憂いも、幾度もくり返してわれわれの心に生き残っていくから。われわれの心に訴えるものは、技倆というよりは精神であり、技術というよりも人物である。呼び声が人間味のあるものであれば、それだけにわれわれの応答は衷心から出てくる。名人とわれわれの間に、この内密の默契があればこそ詩や小説を読んで、その主人公とともに苦しみともに喜ぶのである。わが国の沙翁近松は劇作の第一原則の一つとして、見る人に作者の秘密をうち明かすことが重要であると定めた。弟子たちの中には幾人も、脚本を差し出して彼の称賛を得ようとした者があったが、その中で彼が面白いと思ったのはただ一つであった。それは、双子の兄弟が、人違いのために苦しむという「まちがいつづき」に多少似ている脚本であった。ちかまつがいうには、「これこそ、劇本来の精神を具えている。というのは、これは見る人を考えに入れているから公衆が役者よりも多くを知ることを許されている。公衆は誤りの因を知っていて、哀れにも、罪もなく運命の手に落ちていく舞台の上の人々を哀れむ。」と。

64

大家は、東西両洋ともに、見る人を腹心の友とする手段として、暗示の価値を決して忘れなかった。傑作をうちながめる人たれか心に浮かぶ綿々たる無限の思いに、畏敬の念を起こさないものがある。傑作はすべて、いかにも親しみあり、肝胆相照らしているではないか。これに引き替え、現代の平凡な作品はいかにも冷ややかなものではないか。前者においては、作者の心の温かい流露を感じ、後者においては、ただ形式的の会釈を感じずのみである。現代人は、技術に没頭して、おのれの域を脱することはまれである。竜門の琴を、何のかいもなくかき鳴らそうとした楽人のごとくただおのれを歌うのみであるから、その作品は、科学には近かろうけれども、人情を離れること遠いのである。日本の古い俚諺に「見え張る男には惚れられぬ。」というのがある。そのわけは、そういう男の心には、愛を注いで満たすべき隙間がないからである。芸術においてもこれと等しく、虚栄は芸術家公衆いずれにおいても同情心を害することはなほだしいものである。

65

芸術において、類縁の精神が合一するほど世にも神聖なものはない。その会するやたちまちにして芸術愛好者は自己を超越する。彼は存在すると同時に存在しない。彼は永劫を瞥見するけれども、目には舌なく、言葉をもってその喜びを声に表すことはできない。彼の精神は、物質の束縛を脱して、物のリズムによって動いている。かくのごとくして芸術は宗教に近づいて人間を気高くするものである。昔日本人が大芸術家の作品を崇敬したことは非常なものであった。茶人たちはその秘蔵の作品を守るに、宗教的秘蔵をもってしたから、御神龕（絹地の包みで、その中へ柔らかに包んで奥の院が納めてある）まで達するには、幾重にもある箱をすっかり開かねばならないことがしばしばあった。その作品が人目に触れることは極めてまれで、しかも奥義を授かった人へのみに限られていた。

66

茶道の盛んであった時代においては、太閤の諸将は戦勝の褒美として、広大な領地を賜るよりも、珍しい美術品を贈られることを、一層満足に思ったものであった。わが国で人気ある劇の中には、有名な傑作の喪失回復に基づいて書いたものが多い。例えば、ある劇にこういう話がある。細川侯の御殿には雪村の描いた有名な達磨があったが、その御殿が、守りの侍の怠慢から火災にかかった。侍は万事を賭して、この宝を救い出そうと決心して、燃える御殿に飛び入って、例の掛け物を掴んだ、が、見ればはや、火炎に遮られて、逃れる道はなかったのである。彼は、ただその絵のことの心を心にかけて、剣をもっておのが肉を切り開き、裂いた袖に雪村を包んで、大きく開いた傷口にこれを突っ込んだ。火事はついにしずまった。煙る余人の中に、半焼の死骸があった。その中に、日の災いを被らないで、例の宝物は納まっていた。実に身の毛もよだつ物語であるが、これによって、信頼を受けた侍の忠節はもちろんのこと、わが国人がいかに傑作品を重んじるかということが説明される。

66

しかしながら、美術の価値はただそれがわれわれに語る程度によるものであることを忘れてはならない。その言葉は、もしわれわれの同情が普遍的であったならば、普遍的なものであるかもしれない。が、われわれの限定せられた性質、代々相伝の本性はもちろんのこと、慣例、因習の力は美術鑑賞力の範囲を制限するものである。我らの個性さえも、ある意味においてわれわれの理解力に制限を設けるものである。そして、われわれの審美的個性は、過去の創作品の中に自己の類縁を求める。最も、修養によって美術鑑賞力は増大するものであって、われわれはこれまでは認められなかった多くの美の表現を味わうことができるようになるものである。が、畢竟するところ、われわれは万有の中に自分を見るに過ぎないのである。すなわち特有の性質が我らの理

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

解方式を定めるのである。茶人たちは全く各人ここの鑑賞力の及ぶ範囲内の物のみを収集した。

67

これに関連して小堀遠州に関する話を思い出す。遠州はかつてその門人たちから、彼が収集する物の好みに現れている立派な趣味を、お世辞を言ってほめられた。「どのお品も、実に立派なもので、人皆歎賞おくあたわざるところであります。これによって先生は、利休にもまさる趣味をお持ちになっていることがわかります。というのは、利休の集めた物は、ただ千人に一人しか真にわかるものがいなかったのでありますから。」と。遠州は嘆じて、「これはただいかにも自分が凡俗であることを証するのみである。偉い利休は、自分だけにおもしろいと思われる物をのみ愛好する勇気があったのだ。然るに私は、知らず知らず一般の人の趣味に媚びている。実際、利休は千人に一人の宗匠であった。」と答えた。

67

実に遺憾に堪えないことには、現今美術に対する表面的の熱狂は真の感じに根拠をおいていない。われわれのこの民本主義の時代においては、人は自己の感情には無頓着に世間一般から最も良いと考えられているものを得ようとかしましく騒ぐ。高雅な物ではなくて、高価な物を欲し、美しい物ではなくて、流行品を欲するのである。一般民衆にとっては、彼ら自らの工業主義の尊い産物である営利の定期刊行物をながめる方が、彼らが感心したふりをしている初期のイタリア作品は、足利時代の傑作よりも美術鑑賞の糧としてもっと消化しやすいであろう。彼らのにとっては、作品の良否よりも美術家の名が重要である。数世紀前、品のある批評家の嘆じたごとく、世人は耳によって絵画を批評する。今日いずれの方面を見ても、擬古典的嫌悪を感ずるのは、すなわちこの真の鑑賞力の欠けているためである。

68

なお一つ一般に誤っていることは、美術と考古学の混同である。古物から生ずる崇敬の念は、人間の性質の中で最も良い特性であって、一層これを涵養したいものである。古の大家は、後世啓発の道を開いたことに対して、当然尊敬を受くべきである。彼らは幾世紀の批評を経て、無傷のままわれわれの時代に至り、今もなお光栄荷のうているというだけで、われわれは彼らに敬意を表している。が、もしわれわれが、彼らの偉業を単に年代の古きゆえをもって尊んだとしたならば、それは実に愚かなことである。しかもわれわれは、自己の歴史的同情心が、審美的眼識を無視するままに許している。美術家が無事に墳墓におさめられるとわれわれは称賛の花を手向けるのである。進化論の盛んであった十九世紀には、人類のことを考えて個人を忘れる習慣が作られた。収集家は一時期あるいは一派を説明する資料を得んことを切望して、ただ一個の傑作がよく、一定の時期あるいは一派のいかなる多数の凡俗な策にもまさって、われわれを教えるものであるということを忘れていた。われわれはあまりに分類しすぎて、あまりに楽しむことが少ない。いわゆる科学的方法の陳列のために、審美的方法を犠牲にしたことは、これまで多くの博物館の害毒であった。

69

同時代美術の要求は、人生の重要な計画において、いかなるものにもこれを無視することはできない。今日の美術は真にわれわれに属するものである。今の夜に美術なし、というが、これが責めを負うべきものはたれぞ。古人に対しては、熱狂的に歎賞するにもかかわらず、自己の可能性にはほとんど注意しないことは恥ずべきことである。世に認められようとして苦しむ美術家たち、冷たき軽侮の影に逡巡している疲れた人々よ！等というが、この自己本位の世の中にわれわれは彼らに対してどれほどの鼓舞激励を与えているか。過去が我らの文化の貧弱を哀れむのも道理である。未来はわが美術の貧弱を笑うであろう。われわれは人生の美しいものを破壊することによって美術を破壊している。願わくは、ある大妖術者が出現して、社会の幹から、天才の手に触れてはじめて鳴り渡る弦を具えた大琴を作らんことを祈る。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第六章 花

花は我らの不断の友——「花の宗匠」——西洋の社会における花の浪費——東洋の花卉栽培——茶の宗匠と生花の法則——生花の方法——花のために花を崇拝すること——生花の宗匠——生花の流派、形式派と写実派

76

老子いわく「天地不仁。」弘法大師いわく「生まれ生まれ生まれて生のはじめに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し。」われわれはいずれに向かつて「破壊」に面するのである。上に向かうも破壊、下に向かうも破壊、前にも破壊、後ろにも破壊。変化こそは唯一の永遠である。何故に死を生のごとく喜び迎えないのであるか。この二者はただ互いの相対しているものであって、梵の昼と夜である。古きものの崩壊によって改造が可能となる。われわれは無常な慈悲の神「死」をば種々の名前であがめてきた。拝火教徒が火中に迎えたものは、「すべてを吞噬(どんぜい)するもの」の影であった。今日でも、神道の日本人がその前にひれ伏すところのものは、剣魂の氷のような純潔である。神秘の火は我らの弱点を焼き尽くし、神聖な剣は煩惱の絆を断つ。我らの屍灰の中から天上の望みという不死の鳥が現れ、煩惱を脱して一層高い人格が生まれて出て来る。

77

花をちぎることによって、新たな形を生み出して世人の考えを高尚にすることができるならば、そうしてもよいではないか。われわれが花に求むるところはただ美に対する奉納を共にせん事にあるのみ。われわれは「純潔」と「清楚」に身を捧げることによってその罪滅ぼしをしよう。こういう風な論法で、茶人たちは生花の法を定めたのである。

77

わが茶や花の宗匠のやり口を知っている人は誰でも、彼らが宗教的の尊敬をもって花を見ることに気がついたに違いない。彼らは一枝一条もみだりに切り取ることをしないで、おのが心に描く美的配合を目的に注意深く選択する。彼らは、もし絶対に必要の度を超えて万一切り取るようなことがあると、これを恥とした。これに関連していってもよろしいと思われることは、彼らはいつも、多少でも葉があればこれを花に添えておくということである。というのは、彼らの目的は花の生活の全美を表すにあるから。この点については、その他の多くの点におけると同様、彼らの方法は西洋諸国に行われるものとは異なっている。かの国では、花梗のみ、いわば胴のない頭だけが乱雑にさしこんであるのをよく見受ける。

78

花道の生まれたのは十五世紀で、茶の湯の起こったのと同様らしく思われる。わが国の伝説によると、はじめて花を生けたのは昔の仏教徒であるという。彼らは生物に対する限りなき心やりのあまり、暴風に散らされた花を集めて、それを水桶に入れたということである。足利義政時代の大画家であり、鑑定家である相阿弥は、初期における花道の大家の一人であったといわれている。茶人珠光はその門人であった。また絵画における狩野家のように、花道の記録に有名な池坊の家元専能もこの人の門人であった。十六世紀の後半において、利休によって茶道が完成せられると共に、生花も充分なる発達を遂げた。利休およびその流れをくんだ有名な小田有楽、古田織部、光悦、小堀遠州、片桐石州らは、新たな配合を作ろうとして互いに相競った。しかし茶人たちの花の尊崇は、ただ彼らの審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであって、それだけが独立して、別の儀式をなしてはいなかったということを忘れてはならぬ。生花は茶室にある他の美術品と同様に、装飾の全配合に従属的なものであった。ゆえに石州は「雪が庭に積んでいる時は白い梅花を用いてはならぬ。」と規定した。「けばけばしい」花は無情にも茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花はその本来の目的の場所から取り去ればその趣旨を失うものである。というのは、その線や釣り合いは特にその周囲のものとの配合を考えて工夫してあるのであるから。

79

花を花のためだけに崇拝することは、十七世紀の中葉、花の宗匠が出るようになって起こったのである。そうすると茶室には関係なく、ただ花瓶が課する法則の他には全く法則がなくなった。新しい考案、新しい方法ができるようになって、これらから生まれ出た原則や流派がたくさんあった。十九世紀のある文人のいうところによれば、百以上の異なった生花の流派をあげることができる。広くいえばこれら諸流は、形式派と写実派の二大流派に分かれる。池坊を家元とする形式派は、狩野派に相当する古典的理想主義をねらっていた。初期のこの

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

派の宗匠の生花の記録があるが、それは探雪や常信の花の絵をほとんどそのままにうつし出したものである。一方写実派はその名の示すごとく、自然をそのモデルと思って、ただ美的調和を表現する助けとなるような形の修正を加えただけである。ゆえにこの派の作には浮世絵や四条流の絵をなしている気分と同じ気分が認められる。

79

時の余裕があれば、この時代の幾多の花の宗匠の定めた生花の法則になお詳細に立ち入って、徳川時代の装飾を支配していた根本原理を明らかにすること(そうすれば明らかになると思われるが)は興味あることであろう。彼らは導く原理(天)、従う原理(地)、和の原理(人)のことを述べている、そしてこれらの原理をかたどらない生花は没趣味な死んだ花であると考えられた。また花を、正式、半正式、略式の三つの異なった姿に生ける必要を詳述している。第一は舞踏場へ出る物々しい服装をした花の姿をあらわし、第二はゆったりとした趣のある午後服の姿をあらわし、第三は閨房にある美しい平常着の姿を現すともいわれよう。

80

われらは花の宗匠の生花よりも茶人の生花に対して密かに同情を物。茶人の花は、適当に生けると芸術であって、人生と真に密接な関係を持っているからわれわれの心に訴えるのである。この流派を、写実派および形式派と対象区別して、自然派と呼びたい。茶人たちは、花を選択することで彼らのなすべき事は終わったと考えて、その他のことは花自らの身の上話に任せた。晩冬の頃茶室に入れば、野桜の小枝につぼみの椿の取り合わせてあるのを見る。それは去らんとする冬の名残ときたらんとする春の予告を配合したものである。またいらいらすような暑い夏の日に、昼お茶に行ってみれば、床の間の薄暗い涼しいところにかかっている花瓶には、一輪の百合を見るであろう。露のしたたる姿は人生の愚かさを笑っているように思われる。花の独奏はおもしろいものであるが、絵画、彫刻の協奏曲となれば、その取り合わせには人を恍惚とさせるものがある。石州はかつて湖沼の草木を思わせるように水盤に水草を生けて、上の壁には相阿弥の描いた鴨の空を飛ぶ絵をかけた。紹巴という茶人は、海辺の野花と漁家の形をした青銅の香炉に配するに、海岸のさびしい美しさを歌った和歌をもってした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたとしるしている。

81

花物語は尽きないが、もう一つだけ語ることにしよう。十六世紀には、朝顔はまだわれわれに珍しかった。利休は庭全体にそれを植えさせて、丹誠こめて培養した。利休の朝顔の名が太閤のお耳に達すると太閤はそれを見たいと仰せいだされた。そこで利休は我が家の朝の茶の湯へお招きをした。その日になって太閤は庭中を歩いてご覧になったが、どこを見ても朝顔のあとかたも見えなかった。地面は平らかにして美しい小石や砂がまいてあった。その暴君はむっとした様子で茶室へ入った。しかしそこには見事なものが待っていて彼のきげんは全くなおって来た。床の間には宋細工の珍しい青銅の器に、全庭園の女王である一輪の朝顔があった。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

第七章 茶の宗匠

芸術を真に鑑賞することはただ芸術から生きた力を生み出す人へのみ可能である——茶の宗匠の芸術に対する貢献——処世上に及ぼした影響——利休の最後の茶の湯

82

宗教においては未来が我らの背後にある。芸術においては現在が永遠である。茶の宗匠の考えによれば芸術を真に鑑賞することは、ただ芸術から生きた力を生み出す人々へのみ可能である。ゆえに彼らは茶室において得た風流の高い規範によって彼らの日常生活を律しようと努めた。すべての場合に心の平静を保たねばならぬ。そして談話は周囲の調和を決して乱さないように行わなければならぬ。着物の格好や色彩、身体の均衡や歩行の様子などすべてが芸術的人格の表現でなければならぬ。これらの事柄は軽視することのできないものであった。というのは、人はおのれを美しくしてはじめて美に近づく権利が生まれるのであるから。火曜にして宗匠たちはただの芸術会場のものすなわち芸術そのものとなろうと努めた。それは審美主義の禅であった。我らに認めたい心さえあれば完全は至る所にある。利休は好んだ次の古歌を引用した。 花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや

85

利休が自己犠牲をすることに定められた日に、彼は主なる門人を最後の茶の湯に招いた。客は悲しげに定刻待合に集まった。庭徑を眺むれば樹木も戦慄するように思われ、木の葉のさらさらとそよぐ音にも、家なき亡者の私語が聞こえる。地獄の門前にいるまじめくさった番兵のように、灰色の灯籠が立っている。珍香の香が一時に茶室から浮動して来る。それは客に入れとつげる招きである。一人ずつ進み出ておのおのその席に着く。床の間には掛け物がかかっている、それは昔ある僧の手になった不思議な書であって浮世のはかなさを書いたものである。火鉢にかかって沸いている茶釜の音には、ゆく夏を惜しみ悲痛な思いを鳴いている蟬の音がする。やがて主人が茶室にはいる。おのおの順次に茶をすすめられ、順次に黙々としてこれを飲み干して、最後に主人が飲む。定式に従って主賓がそこでお茶器拝見を願う。利休は例の掛け物と共にいろいろな品を客の前に置く。皆の者がその美しさをたたえて後、利休はその器を一つずつ一座の者へ形見として贈る。茶碗のみは自分でとっておく。「不幸の人の唇によって不浄になった器は決して再び人間には使用させない。」といって彼はこれをなげうって粉碎する。その式は終わった、客は涙をおさえかね、最後の決別をして室を出て行く。彼に最も親密な者がただ一人、後に残って最期を見届けてくれるようにと頼まれる。そこで利休は茶会の服を脱いで、大事にたたんで畳の上におく、それでその時まで隠れていた清浄無垢な白い死に装束があらわれる。彼は短剣の輝く刀身を恍惚とながめて、次の絶唱を詠む。

人生七十、力圀希咄 吾が這の宝剣 祖仏共に殺す 笑みを顔に浮かべながら、利休は冥土へ行ったのであった。

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

類語辞典

xiv

001

002 はしがき 2

003

004

005 はしがき

006

007 はしがき

008

009 はしがき

010

011 はしがき

012

013 はしがき

014

015 はしがき

016

017 はしがき

018

019 第一章 人情の碗 19

第一章 人情の碗

茶は薬用として始まり後飲料となる。シナにおいては八世紀に高雅な遊びの一つとして詩歌の域に達した。十五世紀に至り日本はこれを高めて一種の審美的宗教、すなわち茶道にまで進めた。茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拝することに基づく一種の儀式であって、純じゅんじゅん 粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を醇々と教えるものである。茶道の要義は「不完全なもの」を崇拝するにある。いわゆる人生というこの不可解なものの中に、何か可能なるのを成就しようとするやさしい企てであるから。

茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、に関するわれわれのいっさいの見解を表わしているものであるから。それは衛生学である、清潔をきびしく説くから。それは経済学である、というのは、複雑なぜいたくというよりもむしろ単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾何学である、なんとすれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。それはあらゆるこの道の信者を趣味

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている。

日本が長い間世界から孤立していたのは、自省をする一助となって茶道の発達に非常に好都合

020

021 第一章 人情の碗

であった。われらの住居、習慣、衣食、陶漆器、絵画等 文学でさえも——すべてその影響をこうむっている。いやしくも日本の文化を研究せんとする者は、この影響の存在を無視することはできない茶道の影響は貴人の優雅な聞房にも、下賤の者の住み家にも行き渡ってきた。わが 夫は花を生けることを知り、わが野人も山水を愛でるに至った。俗に「あの男は茶気がない」という。もし人が、わが身の上におこるまじめながらの滑稽を知らないならば。また浮世の悲もやきこつけいはんか つう 劇にとんじやくもなく、浮かれ気分で騒ぐ半可通を「あまり茶気があり過ぎる」と言って非難する。

よその目には、つまらぬことをこのように騒ぎ立てるのが、実に不思議に思われるかもしれぬ。せん かわき ちゃわん 一杯のお茶でなんという騒ぎだろうというであろうが、考えてみれば、煎ずるところ人間享樂の 茶碗は、いかにも狭いものではないか、いかにも早く涙であふれるではないか、無辺を求むる渴のとまらぬあまり、一息に飲みほされるではないか。してみれば、茶碗をいくらもてはやしたとがめだてには及ぶまい。人間はこれよりもまだまだ悪いことをした。酒の神バッカスを崇拜するのあまり、惜しげもなく奉納をし過ぎた。軍神 マーズの血なまぐさい姿をさえも理想化した。はく そうげいろ してみれば、カメリヤの女皇に身をささげ、その祭壇から流れ出る暖かい同情の流れを、心ゆくばかり楽しんでよいではないか。象牙色の磁器にもられた液体琥珀の中に、その道の心得ある人は、孔子の心よき沈黙、老子の奇警、釈迦牟尼の天上の香にさえ触れることができる。

おのれに存する偉大なるものの小を感じることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚氣をなしている千百の奇癖のまたの例に過ぎないと思って、袖の下で笑っているであろう。西洋人は、日本が平和な文芸にふけていた間は、野蛮国と見なしていたものである。しかるに満州の戦場に大々的殺戮を行ない始めてから文明国と呼んでいる。近ごろ武士道—わが兵士に喜び勇んで身を捨てさせる死の術について盛んに論評されてきた。しかし茶道にはほとんど注意がひかれていない。この道はわが生の術を多く説いているものであるが。もしわれわれが文明国たるためには、血なまぐさい戦争の名誉によらなければならないとするならば、むしろいつまでも野蛮国に甘んじよう。われわれはわが芸術および理想に対して、しかるべき尊敬が払われる時期が来るのを喜んで待とう。

いつになったら西洋が東洋を了解するであろう、否、了解しようと努めるであろう。われわれ ける アジア人はわれわれに関して織り出された事実や想像の妙な話にしばしば胆を冷やすことがある。碗 われわれは、ねずみや油虫を食べて生きているのでないとしても、蓮の香を吸って生きていると 思われている。これは、つまらない狂信か、さもなければ見さげ果てた逸樂である。インドの心 靈性を無知といい、シナの誰直を愚鈍といい、日本の愛国心をば宿命論の結果といってあざけられていた。はなはだしきは、われわれは神経組織が無感覚なるため、傷や痛みに対して感じが薄

022

023 第一章 人情の碗

いとまで言われていた。

西洋の諸君、われわれを種にどんなことでも言うてお楽しみなさい。アジアは返礼いたします。まだまだおもしろい種になることはいくらでもあろう、もしわれわれ諸君についてこれまで、想像したり書いたりしたことがすっかりおわかりになれば。すべて遠きものをば美しと見、不思議に対して知らず知らず感服し、新しい不分明なものに対しては、口には出さねど憤るということがそこに含まれている。諸君はこれまで、うらやましく思うこともできないほど立派な徳を負わされて、あまり美しくて、とがめることのできないような罪をさせられている。わが国の昔の文人はその当時の物知りであったまあこんなことを言っている。諸君には着物のどこか見えないところに、毛深いしっぽがあり、そしてしばしば赤ん坊の細切り料理を食べていると! 否、われわれは諸君に対してもっと悪いことを考えていた。すなわち諸君は、地球上で最も実行不可能な人種と思っていた。というわけは、諸君は決して実行しないことを口では説いているといわれていたから。

かくのごとき誤解はわれわれのうちからすみやかに消え去ってゆく。商業上の必要に迫られて欧州の国語が、東洋幾多の港に用いられるようになって来た。アジアの青年は現代的教育を受けるために、西洋の大学

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

に群がってゆく。われわれの洞察力は、諸君の文化に深く入り込むことはできない。しかし少なくともわれわれは喜んで学ぼうとしている。私の同国人のうちには、諸君の習慣や礼儀作法をあまりに多く取り入れた者がある。こういう人は、こわばったカラや丈の高いシルクハットを得ることが、諸君の文明を得ることと心得違いをしていたのである。かかる様子ぶりは、実に哀れむべき嘆かわしいものであるが、ひざまずいて西洋文明に近づこうとする証拠となる不幸にして、西洋の態度は東洋を理解するに都合が悪い。キリスト教の宣教師は与えざるにせよ、きょうのために行き、受けようとはしない。諸君の知識は、もし通りすがりの旅人のあてにならない話に基づくのでなければ、わが文学の貧弱な翻訳に基づいている。ラフカディオ・ハーンの義侠的たいまつ (I) ペン、または『インド生活の組織』の著者のそれが、われわれみずからの感情の松明をもって東洋の闇を明るくすることはまれである。

私はこんなにあけすけに言って、たぶん茶道についての私自身の無知を表わすであろう。茶道の高雅な精神そのものは、人から期待せられていることだけ言うことを要求する。しかし私は立わざわい派な茶人のつもりで書いているのではない。新旧両世界の誤解によって、すでに非常な禍をこうむっているのであるから、お互いがよく了解することを助けるために、いささかなりとも貢献す人情の腕に弁解の必要はない。二十世紀の初めに、もしロシアがへりくだって日本をよく了解していたら、血なまぐさい戦争の光景は見ないで済んだであろうに。東洋の問題をさげすんで度外視すれば、なんとという恐ろしい結果が人類に及ぶことであろう。ヨーロッパの帝国主義は、黄禍のばか叫びをあげることを恥じないが、アジアもまた、白禍の恐るべきをさとるに至るかもしれない。

024

025 第一章 人情の碗

いということは、わかりかねている。諸君はわれわれを「あまり茶気があり過ぎる」と笑うかもしれないが、われわれはまた西洋の諸君には天性「茶気がない」と思うかもしれないではないか。東西両大陸が互いに奇響な批評を飛ばすことはやめにして、東西互いに得る利益によって、よし物がわかって来ないとしても、お互いにやわらかい気持ちになろうではないか。お互いに違った方面に向かって発展して来ているが、しかし互い長短相補わない道理はない。諸君は心の落ちつきを失ってまで膨張発展を遂げた。われわれは侵略に対しては弱い調和を創造した。諸君は信ずることが出来ますか、東洋はある点で西洋にまさっているということを！

不思議にも人情は今までのところ茶碗に東西相合している。茶道は世界的に重んぜられている唯一のアジアの儀式である。白人はわが宗教道徳を嘲笑した。しかしこの褐色飲料は躊躇もなく受け入れてしまった。午後の喫茶は、今や西洋の社会における重要な役をつとめている。盆や茶の打ち合う微妙な音にも、ねんごろにもてなす婦人の柔らかい絹ずれの音にも、また、クリームや砂糖を勧められたり断わったりする普通の問答にも、茶の崇拜は疑いもなく確立しているということがわかる。渋いか甘いかわからない煎茶の味は、客を待つ運命に任せてあきらめる。この一事にも東洋精神が強く現われているということがわかる。

24

ヨーロッパにおける茶についての最も古い記事は、アラビヤの旅行者の物語にあると言われている。八七九年以後広東における主要なる歳入の財源は塩と茶の税であったと述べてある。マルコポーロは、シナの市舶司が茶碗を勝手に増したために、一二八五年免職になったことを記録している。ヨーロッパ人が極東について一層多く知り始めたのは、実に大発見時代の頃である。十六世紀の終わりにオランダ人は、東洋において灌木の葉からさわやかな飲料が造られることを報じた。ジオヴァーニ・パティスタ・ラムージオ(一五五九)、エル・アルメイダ(一五七六)、マフェノ(一五八八)、タレイラ(一六一〇)らの旅行者たちもまた茶のことを述べている。一六一〇年にオランダ東インド会社の船がヨーロッパに初めて茶を輸入した。一六三六年にはフランスに伝わり、一六三八年にはロシアにまで達した。英国は一六五〇年これを喜び迎えて、「彼の卓絶せる、かつすべての医者の推奨するシナ飲料、シナ人はこれを茶と呼び、他国民はこれをティまたはティーと呼ぶ」と言っていた。

この世のすべてのよい物と同じく、茶の普及もまた反対にあった。ヘンリー・セイヴィル(1六七八)のような異端者は、茶を飲むことを不潔な習慣として口をきわめて非難した。ジョウナス・ハンウェイは言った。(茶の説一七五六)茶を用いれば男は身のたけ低くなり、みめをそこない女はその美を失うと。茶の価の high ために(一ポンド約十五シリング)初めは一般の人の人情のきょうおう消費を許さなかった。「歓待饗応用の王室御用品、王侯貴族の贈答用品」として用いられた。しかしこういう不利な立場にあるにもかかわらず、喫茶は、すばらしい勢いで広まって行った。十八世紀前半におけるロンドンのコーヒー店は、実際喫茶店となり、アディソンやスティールのよ

027 第一章 人情の碗

うな文士のつどうところとなり、茶を喫しながらかれらは退屈しのぎをしたものである。この飲料はまもなく生活の必需品 一課税品となった。これに関連して、現代の歴史において茶が いかにより主要な役を務めているかを思い出す。アメリカ植民地は圧迫を甘んじて受けていたが、ついに、茶の重税に堪えかねて人間の忍耐力も尽きてしまった。アメリカの独立は、ボストン港に 茶箱を投じたことに始まる。

茶の味には微妙な魅力があつて、人はこれに引きつけられないわけにはゆかない、またこれを 理想化するようになる。西洋の茶人たちは、茶のかおりとかれらの思想の芳香を混ざるに鈍では ござらん なかった。茶には酒のような傲慢なところがない。コーヒーのような自覚もなければ、またココアのような気取った無邪気もない。一七〇一年にすでにスペクテイター紙に次のように言っている。「それゆえに私は、この私の考えを、毎朝、茶とバターパンに一時間を取っておかれるよう なすべての立派な御家庭へ特にお勧めしたいと思ひます。そして、どうぞこの新聞を、お茶の したくの一部として、時間を守って出すようにお命じになることを、せつにお勧めいたしま いんごう す。」サミュエル・ジョンソンはみづからの人物を描いて次のように言っている。「因業な恥知ら ずのお茶飲みで、二十年間も食事を薄くするにただこの魔力ある植物の振り出しをもつてした。そして茶をもつてタベを楽しみ、茶をもつて真夜中を慰め、茶をもつて晨を迎えた。」

ほんとうの茶人チャールズ・ラムは、「ひそかに善を行なつて偶然にこれが現われることが何よりの愉快である。」というところに茶道の真髓を伝えている。というわけは、茶道は美を見い ださんがために美を隠す術であり、現わすことをはばかりのようなものをほのめかす術である。この道はおのれに向かつて、落ち着いてしかし十分に笑うけだかい奥義である。従つてヒューマー そのものであり、悟りの微笑である。すべて真に茶を解する人はこの意味において茶人と言つて はいたいき もよからう。たとえばサッカレー、それからシェイクスピアはもちろん、文芸廃額期の詩人もまた。(と言つても、いずれの時か廃額期でなからう)物質主義に対する反抗のあまりいくらか茶道 の思想を受け入れた。たぶん今日においてもこの「不完全」を真摯に静観してこそ、東西相会ししんし 互いに慰めることができるであらう。

27

道教徒は言う、「無始」の始めにおいて「心」と「物」が決死の争闘をした。ついに大日輪皇帝は闇と地の邪神祝融に打ち勝った。その巨人は死苦のあまり頭を天涯に打ち付け、硬玉の青天を粉碎した。星はその場所を失ひ、月は夜の寂寞たる天空をあてもなくさまよつた。失望のあまり黄帝は遠く広く天の修理者を求めた。探し求めたかいはあつて東方の海から女媧という女皇、角をいただき竜尾をそなへ、火の甲冑をまつて燦然たる姿で現れた。その神は不思議な大鎌に五色の虹を焼き出し、シナの天を建て直した。しかしながら、また女媧は蒼天にある二個の小隙を埋めることを忘れたと言われている。かくのごとくして愛の二元論が始まつた。すなわち二個の霊は空間を流転して留まることを知らず、ついに合して始めて完全な宇宙をなす。人はお

029 第二章 茶の諸流

のおのの希望と平和の天空を新たに立て直さなければならぬ。現代の人道の天空は富と権力を得んと争う莫大な努力によって全く粉碎せられている。世は利己、俗悪の闇に迷っている。知識は心にやましいことをして得られ、仁は実利のために行われている。東西両洋は、立ち騒ぐ海に投げ入れられた二竜のごとく、人生の宝玉を得ようとすれどもそのかいもない。この大荒廢を繕おうために再び女媧を必要とする。我々は大権化の出現を待つ。まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るいつゆの日は竹林にはえ、泉水はうれしげな音を立て、松籟は我が茶釜に聞こえている。はかないことを夢見て美しいとりとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。

第二章 茶の諸流

茶の進化の三時期――唐、宋、明の時代を表す煎茶、抹茶、**だし**茶――茶道の鼻祖陸羽――三代の茶に関する理想――後世のシナ人には茶は美味な飲料ではあるが理想ではない――日本においては茶は生の術に関する宗教である

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

茶は芸術品であるから、その最もけだかい味を出すには名人を要する。茶にもいろいろある、たゞく絵画に傑作と駄作と概して後者があると同様に。と言っても、立派な茶をたてるのにこれぞという秘法はない、ティシアン、雪村のごとき名画を作製するのに何も規則がないと同様に。茶はたてるごとに、それぞれ個性を備え、水と熱に対する特別の親和力を持ち、世々相伝の追憶を伴ない、それ独特の話しぶりがある。真の美は必ず常にここに存するのである。芸術と人生のこの単純な根本的法則を、社会が認めないために、われわれはなんという損失をこうむっている。りちゅうこう ことであろう。宋の詩人李仲光は、世に最も悲しむべきことが三つあると嘆じた、すなわち誤れる教育のために立派な青年をそこなうもの、鑑賞の俗悪なために名画の価値を減ずるもの、手ぎわの悪いために立派なお茶を全く浪費するものこれである。

芸術と同じく、茶にもその時代と流派とがある。茶の進化は概略三大時期に分けられる、抹茶および海茶すなわちこれである。われわれ現代人はその最後の流派に属している。これら茶のいろいろな味わいは、その流行した当時の時代精神を表わしている。と言うのは、人生はわれらの内心の表現であり、知らず知らずの行動はわれわれの内心の絶えざる発露であるから。孔

030

031 第二章 茶の諸流

子いわく「人いづくんぞさんや、いるんずくんぞさんや」と。たぶんわれわれは隠すべき偉大なるのが非常に少ないからであろう、些事に自己を顕わすことが多すぎて困る。日々起こる小事件も、哲学、詩歌の高翔と同じく人種的理想の評論である。愛好する葡萄酒の違いでさえ、ヨーロッパのいろいろな時代や国民のそれぞれの特質を表わしているように、茶の理想もいろいろな情調の東洋文化の特徴を表わしている。煮る団茶、かき回す粉茶、淹す葉茶はそれぞれ、唐、宋、明の気分を明らかに示している。もし、芸術分類に濫用された名称を借りるとすれば、これらをそれぞれ、古典的、ローマン的、および自然主義的な茶の諸流と言えるであろう。

南シナの産なる茶の木は、ごく早い時代からシナの植物学界および薬物学界に知られていた。古典には？？？？というようないろいろな名前を書いてあって、疲労をいやし、精神をさわやかにし、意志を強くし、視力をととのえる効能があるために大いに重んぜられた。ただに内服薬として服用せられたのみならず、しばしばリューマチの痛みを軽減するために、として外用薬にも用いられた。道教徒は、不死の靈薬の重要な成分たることを主張した。仏教く徒は、彼らが長時間の黙想中に、睡魔予防剤として広くこれを服用した。

四五世紀のころには、揚子江流域住民の愛好飲料となった。このころに至って始めて、現代用いている「茶」という表意文字が造られたのである。これは明らかに、古い「様」の字の俗字であろう。南朝の詩人は「液体硬玉の泡沫」を熱烈に崇拜した跡が見えている。また帝王は、高官の者の勲功に対して上製の茶を贈与したものである。しかし、この時期における茶の飲み方はきはじかみきつびわめて原始的なものであった。茶の葉を蒸して臼に入れてつき、団子として、米、塩、橘皮、もうこ香料、牛乳等、時には葱とともに煮るのであった。この習慣は現今チベット人および蒙古種族の間に流行していて、彼らはこれらの混合物で一種の妙なシロップを造るのである。ロシア人がレモンの切れを用いるのは彼らはシナの隊商宿から茶を飲むことを覚えたのであるが——小の古代の茶の飲み方が残っていることを示している。

茶をその粗野な状態から脱して理想の域に達せしめるには、実に唐朝の時代精神を要した。八世紀の中葉に出た陸羽をもって茶道の鼻祖とする。彼は、仏、道、儒教が互いに混淆せんとしている時代に生まれた。その時代の汎神論的象徴主義に促されて、人は特殊の物の中に万有の反映を見るようになった。詩人陸羽は、茶の湯に万有を支配している物と同一の調和と秩序を認めた。彼はその有名な著作茶教(茶の聖典)において、茶道を組織立てたのである。爾来彼は、シナの茶をひさぐ者の保護神としてあがめられている。茶経は三巻十章よりなる。彼は第章において茶の源を論じ、第二章、製茶の器具を論じ、第三章、製茶法を論じている。彼の説によれば、茶の葉の質の最良なものは必ず次のようなものである。

胡人ののごとくなる者蹙縮然たり 牛の臍なる者廉然たり 浮雲の山をいずる者輪菌

032

033 第二章 茶の諸流

然たり軽の水を払う者澹然たり また新治の地なる者暴流糧雨の経る所に遭うがごとし

第四章はもっぱら茶器の二十四種を列举してこれについての記述であって、風炉に始まり、これらのすべての道具を入れる都鑑に終わっている。ここにもわれわれは陸羽の道教象徴主義に対する偏好を認める。こ

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

れに関して、シナの製陶術に及ぼした茶の影響を観察してみることもま 興味あることである。シナ磁器は、周知のごとく、その源は硬玉のえも言われぬ色合いを表わ のうらん みんな だしちゃ よくこくかつしょく そうとの試みに起こり、その結果唐代には、南部の青磁と北部の白磁を生じた。陸羽は青色を茶 碗に理想的な色と考えた、青色は茶の緑色を増すが白色は茶を淡紅色にしてまずそうにするから。それは彼が団茶を用いたからであった。その後末の茶人らが粉茶を用いるに至って、彼らは濃藍 色および黒褐色の重い茶碗を好んだ。明人は淹茶を用い、軽い白磁を喜んだ。

第五章において陸羽は茶のたて方について述べている。彼は塩以外の混合物を取り除いている。彼はまた、これまで大いに論ぜられていた水の選択、煮沸の程度の問題についても詳述している。彼の説によると、その水、山水を用うるは上江水は中、井水は下である。煮沸に三段あるそ ゆうせんれんしゅ (داد とりばこおり (一匹) の沸魚目のごとく、すこし声あるを一沸となし、縁辺の涌泉蓮珠のごとくなるを二沸となし、騰波鼓浪を三沸となしている。団茶はこれをあぶって嬰兒の臂のごとく柔らかにし、紙袋を用い てこれをたくわう。初沸にはすなわち、水量に合わせてこれをととのうに塩味をもってし、第

034

035 第二章 茶の諸流

036

037 第二章 茶の諸流

038

039 第三章 道教と禅道 38

040

041 第三章 道教と禅道

042

043 第三章 道教と禅道

044

045 第三章 道教と禅道

046

047 第三章 道教と禅道

048

049 第四章 茶室 49

050

051 第四章 茶室

052

053 第四章 茶室

054

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

055 第四章 茶室

056

057 第四章 茶室

058

059 第四章 茶室

060

061 第五章 芸術鑑賞 61

062

063 第五章 芸術鑑賞

064

065 第五章 芸術鑑賞

066

067 第五章 芸術鑑賞

068

069 第五章 芸術鑑賞

070

071 第六章 花 70

072

073 第六章 花

074

075 第六章 花

076

077 第六章 花

078

079 第六章 花

080

081 第六章 花

082

083 第七章 茶の宗匠 82

『茶の本』

岡倉天心著 岩波文庫

084

085 第七章 茶の宗匠

086

087 第七章 茶の宗匠

088

089

090

091

092

093

094

095

096

097

098

099